

二〇二五年六月二八日（土）

担当 神塚淑子

I

【原文】

天上文解六極大集天上八月校書象天地法以除災害（二）

惟上古之道、修身正己、不敢犯神靈之所「犯」記（二）、乃敢求生索活於天君。不敢自恣、恐不全、日念生、意與神爲「神」臣（三）、表其類也。欲得盡忠直之言、與諸所部主者之神、各各分明是非、乃敢信理曲直耳、何日有忘須臾之間。

上有占人、具知是非、何所隱匿、何所（四）不信者也。故得自理、求念本根、未曾有小不善之界也。但自惜得爲人、依仰元氣、使得蠕動之物、所不覩見災異之屬。但人負信于誓言、兩不相信、故有所不安。天地中和上下各（五）有信、人不得知其要（六）。

人食五常之氣、無所不稟（七）無所不依、無所不（食）行（八）。失（九）善從惡、命（一〇）不全。何獨如（二）是耶。故天君言、常（二）有善有惡（一三）、「故」自（一四）有當直之者。故「誤」（一五）惡、以分明天地四時五行之意、使知成生爲重、增其年命（一六）。人得生成之道、承用其禁、不敢「懈怠」（一七）。以是言之、天知愚人甚薄而無報復之意、逆天所施爲、證天所施爲、加人所施爲（一八）。行〔也〕邪（一九）中類、反當活惡疾善也。故聖人知陰陽之會、賢人理其曲直、解其未知、使各自（一〇）分〔盡〕畫（二）不相怨。善自命長、惡自命短、何可所疑、何可（二二）所怨乎。

【校勘】

經・太平經卷之一百一十（庚部之八）「大功益年書出歲月戒第一百七十九」

（二）經無「天上文解六極大集天上八月校書象天地法以除災害」二十二字。

☆『太平經合校』附錄「太平經校後雜記」云、「太平經鈔節錄經文的時候、往往即用篇末的篇旨移植篇首、當做題目。如經卷一百十『大功益年書出歲月戒』是題目、它的第一句是『惟上古之道』。檢鈔庚部第九葉節錄經文、不著題目、但以『大功益年書出歲月戒』的篇末篇旨『天上文解六極大集天上八月校書象天地法以除災害』移植鈔文『惟上古之道』之前、當作題目了。」

- （二）「犯」經作「記」。今從經。
- （三）「神」經作「臣」。今從經。
- （四）「所」下、經有「有」字。
- （五）「各」下、經有「自」字。
- （六）「要」下、經有「而言何獨有善有惡耶災異悉所從生」十五字。
- （七）「稟」下、經有「無所」二字。今從經。
- （八）「食」經作「行」。今從經。
- （九）「失」上、經有「獨何不奉知古有知人相及逮乎此爲」十五字。
- （一〇）「命」上、經有「令」字。
- （一一）「如」經作「而」。
- （一二）經無「常」字。

(一三) 「惡」下、經有「善可令同。所以然者、當令有分別、不可自從、善當上行、惡當見刑、何得與善相及耶。以人意言之、亦爲可知」四十一字。

(一四) 「故」經作「自」。今從經。

(一五) 「誤」經作「設」。今從經。

(一六) 「年命」經作「命年」。

(一七) 「懈怠」經作「觸忌」。今從經。

(一八) 經無「爲」字。

(一九) 「也」經作「邪」。今從經。

(二〇) 「自」下、經有「知」字。

(二一) 「盡」經作「畫」。今從經。

(二二) 經無「何可」二字。

【訓讀】

天上文解六極大集天上八月校書象天地法以除災害（天上の文、六極大いに集まり、天上に八月に校書し、天地の法に象り、以て災害を除くを解す。）

惟れ上古の道は、身を修め己を正し、敢へて神靈の記す所を犯さず、乃ち敢へて天君に生を求め活を索む。敢へて自ら恣にせず、全からざるを恐れ、日び生を念じ、神と臣と為り、其の類なるを表さんことを意ふ。忠直の言を尽くし、諸々の部する所の主者の神と、各各是非を分明にするを得んと欲し、乃ち敢へて曲直を信べ理むるのみ。何れの日か須臾の間に忘るること有らんや。

上に人を占ふもの有り、具さに是非を知る。何の隠匿する所、何の信ならざる所の者あらん。故に自ら理めて、本根を求める念じ、未だ曾て小不善の界有らざるを得るなり。但だ自ら人と為るを得るを惜しみ、元氣に依仰して、蠕動の物をして、災異の属を観見せざる所なるを得しめんとす。但だ人は信を誓言に負き、両つながら相ひ信ぜず。故に安らかならざる所有り。天地中和上下、各おの信有り。人、其の要を知るを得ず。

人は五常の氣を食し、稟けざる所無く、依らざる所無く、行はざる所無し。善を失ひ悪に従へば、命全からず。何ぞ独り是の如きや。故に天君言ふ、常に善有り惡有り、自ら當に之に直^{あた}るべき者有りと。故に惡を設け、以て天地四時五行の意を分明にし、成生を重しと為すを知り、其の年命を増さしむ。人生成の道を得れば、其の禁を承用し、敢へて忌に触れず。是れを以て之を言へば、天は愚人の甚だ薄くして報復の意無く、天の施為する所に逆ふを知り「**知る**」は「**疾善**」^{までか}、天の施為する所は、人の施為する所に加ふるを証す。邪を行ひて中^{あた}り類すれば、反つて當に惡を活かし善を疾ならしむ「**にくましむ?**」なり。故に、聖人は陰陽の会を知り、賢人は其の曲直を理め、其の未だ知らざるを解せしめ、各おのをして自ら分画して相ひ怨まざらしむ。善なれば自ら命長く、惡なれば自ら命短し、何の疑ふ所なる可きや、何の怨む所なる可きや。

【日本語訳】

天上文解六極大集天上八月校書象天地法以除災害（天上の文、六極がみな集まり、天上において八月に書を調べ正し、天地の法に象つて災害を除くことを解き明かす。）

そもそも上古の道は、己れの身を正しく修め、神靈が（悪事として）記録するようなことは決して犯さないようにし、そうして天君に対して生を求めるものである。決して放恣な行いはせず、わが身を完全なままに保つことができなくなるのを恐れ、毎日、生を念じ、神に対し臣下となり、神と同類であることを示すとする。忠実正直の言を尽くして、諸々の部署に配置された担当の神々と、それぞれに是非を明らかにすることができるよう

にと思い、あえて曲直を正すのである。どうして片時も忘れる日があるうか。

天上には人を占つてゐるものがいて、つぶさに人の是非を知つてゐる。どうして隠したりできようか。どうして眞実でないことがあらうか。それゆえ、自分を正し、根本を求める念じ、ほんの少しも不善の界域に入らないようにすることができるのである。ただ自ら人となることができたことを大事にし、根元の氣を頼り尊び、うごめき進む小さな虫のような物までもが、災異の類いを見ることがないようにさせたいと思う。しかし、人は誓いの言葉に背き、（天と人との）双方が相手を信用できなくなる。そこで、安らかではない事態が生じる。天・地・中和、上下には、それぞれに信実があるが、人はその要点を知ることができない。

人は五常の氣を食し、あらゆるものを受け取るものを依拠し、あらゆることを行ふ。「**人**はうのに、」善を失い惡に従えば、寿命は全うできない。どうしてそのようになるのか。それゆえ天君は、常に善があり惡があつて、おのずからちようどそれに当てはまるものがあると説く。それゆえ、惡を設けて、天地四時五行の気持ちを明らかにし、万物が生まれ育つのを重んじてることを教え、その寿命を増やさせるのである。人はこの生成の道を得れば、その禁忌を遵守し、決して禁に触れる行いはしない。このことから言え、天は、愚人がきわめて薄情で、天の恩に報いる気持ちはなく、天が施し行うことに逆らうものであることを知つており、天が行うことは、人が行うことの上に加えられるものであることを証明しようとしているのである。邪惡を行う者が才神靈と同類であるとするならば、かえつて悪人を生かし、善人を病ませることになつてしまふ。それゆえ、聖人は陰陽の際会を知り、賢人は曲直を正して、まだわかつていらない人を理解させ、各自がみずから善と惡の境界をはつきりさせて怨まないようにならせるのである。善を行う者はおのずから寿命が長く、惡を行う者はおのずから寿命が短い。何の疑いを抱くことがあらうか。何の怨むことがあらうか。

【注】

○神靈之所〔犯〕記

『太平經』庚部《貪財色災及胞中誠》第一百八十五「俗世之人、少孝少忠、貪慕所好、劫奪取非、其有殺心、不離口吻。何望活哉。会有殃咎、早与晚耳。奉承天文神靈所記、致當遠之、不可自試。試生得生、試死得死、会死不疑。」

○求生素活

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「聞人有過、助其自悔。主其有知、善所諫、用其人言、並見其榮、善教戒人求生素活之道。是善人之極、但當有功、不敢違神之

願、思慕長在。」

『老子』第五十章「人之生、動之死地十有三。夫何故、以其求生之厚。」河上公注「所以動之死地者、以其求生活之事太厚、違道忤天、妄行失紀。」

○不敢自恣恐不全

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「天下之事、孝忠誠信為大、故勿得自放恣。復奪人算、不得久長。慎之慎之、勿懈也。」

『太平經』庚部《不可不祠訣》第一百九十六「天下之人、何不自責而使過少、積過何益於人身乎。但有不全人命耳。」

○念生

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「念生得生、是為知。惡會當盡、不得久在、知之不乎。」

○所部主者之神
『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「大神言、皆當有所部主、乃見信理。」

○信理曲直

『後漢書』卓魯魏劉列伝「恭專以德化為理、不任刑罰。訟人許伯等爭田、累守令不能決。恭為平理曲直、皆退而自責、輟耕相讓。」

○何日有忘須臾之間

『太平經』庚部《天報信成神訣》第一百九十七「自知受天報施、何可有忘須臾之間息。……恩貸畢足、不敢解忘須臾之間而背恩也。」

○上有占人

『太平經』庚部《善仁人自貴年在壽曹訣》第一百八十二「天上地下、相承如表裏、復置諸神並相使。故言天君敕命曹、各各相移、更為直符、不得小私、從上占下、何得有失。」楊雄《法言》五百「或問、聖人占天乎。曰、占天地。若此、則史也何異。曰、史以天占人、聖人以人占天。」

○自理

『太平經』庚部《不可不祠訣》第一百九十六「或使遭縣官、財產單盡、復繞怨禍、汝行之所致不乎。何怨於天而呼怨乎。俗人乃如是、欲復犯天、自理何益乎。」

○小不善之界

『太平經』庚部《見誠不觸惡訣》第一百九十五「無一小不善之辭、可得延命。」
『淮南子』繆稱訓「小不善積而為大不善。」

○但自惜得爲人

『太平經』丙部《急學真法》第六十六「人者、天之子也、當象天為行。今乃失法、故人難治。教導之以道與德、乃當使有知自重自惜自愛自治。」

○依仰

『三國志』魏書・董昭伝「兗州諸軍近在許耳。有兵有糧、國家所當依仰也。」

○蠕動之物

『太平經』庚部《不忘誠長得福訣》第一百九十「雲雨布施、民憂司農事、元氣帰留、諸穀草木蛟行喘息蠕動、皆含元氣、飛鳥步獸、水中生亦然、使民得用奉祠及自食。」

『史記』匈奴列伝「元元万民、下及魚鱉、上及飛鳥、跂行喙息蠕動之類、莫不就安利而辟危殆。」

○負信于誓言

『後漢書』袁張韓周列伝「雲以大臣典辺、不宜負信於戎狄。還之足示中國優貸、而使辺人得安、誠便。」

『尚書』湯誓「爾無不信、朕不食言。爾不從誓言、予則孥戮汝、罔有攸赦。」

○天地中和

『太平經』丙部《起土出書訣》第六十一「夫天地中和凡三氣、內相與共為一家、反共治生、共養万物。天者主生、稱父。地者主養、稱母。人者主治理之、稱子。」

○五常之氣

『論衡』論死「人之所以聰明智慧者、以含五常之氣也。五常之氣所以在人者、以五藏在形中也。五藏不傷、則人智惠。五藏有病、則人荒忽。荒忽則愚癡矣。人死、五藏腐朽、腐朽則五常無所託矣。所用藏智者已敗矣、所用為智者已去矣。」

○成生

『春秋繁露』陰陽義「是故天之道以三時成生、以一時喪死。」

○增其年命

『太平經』庚部《大壽誠》第二百「想民當如是、何為犯之、自致不壽、亡其年命乎。」

『太平經』庚部《七十二色死尸誠》第一百八十六「各自有壽、務道求善、增年益壽、亦可長生。」

○承用

『漢書』董仲舒伝「今吏既亡教訓於下、或不承用主上之法、暴虐百姓、與姦為市、貧窮孤弱、冤苦失職、甚不稱陛下之意。」

○觸忌

『太平經』丙部《分解本末法》第五十三「可駭哉、愚生觸忌諱過言耳。」

『論衡』辨崇「然則人之生也、精氣育也。人之死者、命窮絕也。人之生、未必得吉逢喜。其死、獨何為謂之犯凶觸忌。」

○愚人甚薄而無報復之意

『太平經』庚部《有過死謫作河梁誠》第一百八十八「愚人無知、不肯報謝、自以職當然、反心意不平、彊取人物以自榮、無報復之心、不顧患難、自以可竟天年。」

○中類

『太平經』庚部《天咎四人辱道誠》第二百八「汝居地上、不中師法、上天安而反中師法哉。子欲知其審實、此若小居民間、不中師法也、至於帝王之前、寧而中師法不哉。如使處下、不中師法、而上天反畜之以為師法中類、天上与帝王之前、反當主畜積邪惡之人邪哉。」

○陰陽之會

『太平經』己部《万二千國始火始氣訣》「願請問天地開闢以來、人或烈病而死尽、或水而死尽、或兵而死尽。願聞其意、何所犯坐哉。將悉天地之際會邪、承負之厄耶。然、古今之文、多說為天地陰陽之會、非也。是皆承負厄也。」

○分畫

『太平經』庚部《某訣》第二百四「音聲者、即是樂之語談也。占遠占近、皆當合之。日時姓字、分画境界、王相休廢、更相取合、以為談語、精者聽之無失也。」

『後漢書』崔駰列傳「分画定而計決兮、豈云賁乎鄙哉、遂懸車以繫馬兮、絕時俗之進取。」

II

【原文】

善者著善之文、不失其文、不失其常、不失其宜。是爲上德。無所不成、無所不就、不失其明、不失其實、不失陰陽所生成、不失四時主生之氣所出入、不失五行之成、不失日月星辰、不失其度數、不失吉凶之期、不失（二）災異之變、不失水旱之紀、人命長短（三）、不失所稟繫星宿厚薄之意。是上德所當行也。故（三）有德之人、無所不照、無所不見、上下中和、各從其宜、就其德、各不失其名、是爲順常。

長生之文、莫不被榮。萬物巖牙、剖（四）甲而生、垂枝布葉、以當衣裳、霧露雪霜（五）、時雨以當飲食、生長自成覆華（六）實、令給人。地之長、名爲水母。民名爲瓜、盛夏之（七）時、以當水漿。天下所仰、人（八）皆食之。是德人承天統、成天形（仰）於（九）地以給民食、行（思）恩（二〇）布施、無不被德、以自飽足（二一）。是天恩（二二）。天所施生甚大、不順命、（及）（二三）言自然、是爲逆（二四）。故有德之人（二五）、上知天意、教民作法、無失天心、育養長大、使得爲人。復知文理、行成德就、可上及天士。

天上之事、功勞有差。德人主知地之事、命（二六）民依仰。重見恩施不能以時報之、德人爲天行氣、上下中央不得其所者、人反輕天所施爲。是正令天怒不止、神靈不愛人、侵奪年命、反自怨非天（二七）。故下神書、令（二八）民不犯也（二九）。

【校勘】

經・太平經卷之一百一十（庚部之八）「大功益年書出歲月戒第一百七十九」

- (二) 「失」下、經有「有」字。
- (二) 「長短」、經作「短長」。
- (三) 「故」下、經有「言」字。
- (四) 「剖」、經作「部」。
- (五) 「雪霜」、經作「霜雪」。
- (六) 「華」、經作「葉」。
- (七) 「之」、經作「熱」。
- (八) 「人」下、經有「無大小」三字。
- (九) 「仰」、經作「於」。今從經。
- (一〇) 「思」、經作「恩」。今從經。
- (一一) 「足」、經作「滿」。
- (一二) 「天恩」下、經有「非也」二字。
- (一三) 「及」、經作「反」。今從經。
- (一四) 「逆」下、經有「耳」字。
- (一五) 「有德之人」、經作「使德人」。
- (一六) 「命」、經作「令」。
- (一七) 「天」下、經有「是愚甚劇」。
- (一八) 「令」、經作「使」、「使」字下有「住勅爲施禁固既」七字。
- (一九) 經無「也」字。

【訓読】

善なる者は、善の文に著す。其の文を失はず、其の常を失はず、其の宜しきを失はず。是れ上徳と為す。成らざる所無く、就らざる所無く、其の明を失はず、其の実を失はず、陰陽の生成する所を失はず、四時主生の氣の出入する所を失はず、五行の成を失はず、日月星宿を失はず、其の度数を失はず、吉凶の期を失はず、災異の変を失はず、水旱の紀を失はず、人命の長短、稟繫する所の星宿厚薄の意を失はず。是れ上徳の当に行ふべき所なり。故に有徳の人は照さざる所無く、見ざる所無く、上下中和、各おの其の宜しきに従ひ、其の徳に就き、各おの其の名を失はず。是れ順常と為す。

長生の文、栄を被らざるは莫し。万物 岩いわのいわごとく牙いばゑ、甲を剖きて生じ、枝を垂れ葉を布きて、以て衣裳に当て、霧露雪霜時雨、以て飲食に当て、生長自ら成り、華実を覆ひて、人に給せしむ。地の長、名づけて水母と為す。民は名づけて瓜と為し、盛夏の時、以て水漿に当つ。天下の仰ぐ所にして、人皆 之を食らふ。是れ徳人、天の統を承け、天の形を地に成して、以て民に食を給し、恩を行ひ布施す。徳を被らざること無く、以て自ら飽足す。是れ天恩なり。天の施生する所 甚だ大なるも、命に順はず、反つて自ら然りと言ふは、是れ逆と爲す。故に有徳の人、上のかた天意を知り、民に教へ法を作り、天心を失ふこと無く、育養長大し、人と為るを得しむ。復た文理を知り、行成り徳就りて、上のかた天士に及ぶ可し。

天上の事、功労 差有り。徳人は地の事を主知し、民に命じて依仰せしむ。重ねて恩施の時を以て之に報ずること能はざるを見るや、徳人は天の為に氣を上下中央、其の所を得ざる者に行らすも、人は反つて天の施為する所を軽んず。是れ正に天の怒りをして止まざらしめ、神靈は人を愛さず、年命を侵奪す。反つて自ら天を怨非す。故に神書を下し、民をして犯さざらしむなり。

【日本語訳】

善い行いは、善行を記録する文書に書き著される。その文書からはずれることなく、恒常性を失うことなく、適切さを失うこともない。これを上徳という。あらゆることを成し遂げ、あらゆることを成就し、その明晰さを失わず、その信実を失わず、陰陽の生成化育の働きを見失うことなく、春夏秋冬四時の生をつかさどる氣の出入を見失うことなく、五行の氣の万物生成の働きを見失うことなく、日月星宿の動きを間違えることなく、その度数を間違えることなく、吉凶の期を見失うことなく、災異の変を見失うことなく、水害・干害の起こる時期を見失うことなく、人命の長短については、それが稟受し繋がつてゐるところの星宿の、手厚いか薄いかという意図を見間違えることはない。これが、上徳の人に行うべきことである。それゆえ、有徳の人は、あらゆることを照察し、あらゆることに目が届き、上下中和（天地人）それぞれがそのふさわしいあり方に従い、その徳に付き従い、それぞれがその名を失うことはない。これを「常に順う」という。

長生の文は、すべてのものがそれの恩を受けて栄えている。万物は巖のように芽生え、固い殻を裂いて芽生え、枝を垂れ葉を広げて、それを衣装とし、霧露雪霜や、ほどよい時に降る雨を飲食として、おのずから生長し、上から被うように花や実を垂らして、人々に与えさせる。地の中で最もすぐれたものを水母（母なる水？）と名づける。民はそれを瓜と呼び、真夏にはそれを飲み物とする。それは天下の人々が頼りにするものであり、人々は皆それを食べる。これは、有徳の人が天の統を受け、地において天の形を作ることによつて、民に食べ物を与え、恵みを与える施しを行つてゐるということなのである。人々は皆、その恩徳を受けて、腹いっぱい食べることができる。これは天恩である。天が万物に施し生かしている働きは非常に大きいのに、人々は天命に順わず、かえつて「（天の力ではなく）おのずからそうなつてゐるのだ」と言う。これはさかさまな考えである。それゆえ有徳の人は、上のかた天意を知り、民を教化して法を作り、天の心を見失うことなく、養育生長させ、人となることができるようにならせる。さらには、天地のことわりを知つて、徳行が成就すれば、上のかた天上の土にまでなることができる。

天上の事は、功労に差異がある。徳人は地の事を職掌として司り、民が天を頼り尊ぶようにならせる役目を持つ。天の恩施に対して、（民が）すぐにそれに報いることができないのを何度も見ると、徳人は天のために上下中央の、しかるべき状態を得ていらない者に気をめぐらす。（すると）人はかえつて天の行いを軽んじる。これこそが、天の怒りが止まず、神靈は人を愛さず、寿命を奪わせてしまう原因である。ところが、人はかえつて天を怨み非難する。それゆえ、神書を下し、民に悪事を犯さないようにさせるのである。

【注】

○著善之文

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「上善之人、皆生於自然、皆有曆紀、著善籍之文。名之為善人之籍。」

○不失其文

『太平經』庚部《七十二色死尸誠》第一百八十六「大惡之家、無大小、鬼神所憎、但可自正、勿非謗神。……惡者不失其文、輒舉上白。」

○不失其常

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「心自忿、當前後深知至意、不失其常、念恩不違精實、貪生望活、何有小惡聞上乎。」

『淮南子』說山訓「故食草之獸、不疾易藪、水居之虫、不疾易水。行小變而不失常。」

○不失其宜

『太平經』庚部《有德人祿命訣》第一百八十一「惟太上有德之人、各自有理、深知未然之事、照達上下、莫不得開。心之所念、常不離於內、思盡所知、而奉行大化、布置正天下、所當奉述、皆不失其宜。」

○上德

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「上德之人、乃與天地之間、當化成之事、使各如願。」

『老子』第三十八章「上德不德、是以有德。」

『老子』第四十一章「上德若谷。」

○四時主生之氣

『太平經鈔』丁部「天數五、地數五、人數五、三五十五、而內藏氣動。四五二十、與四時氣合而欲施、四時者主生、故欲施生。」

『漢書』董仲舒傳「天道之大者在陰陽。陽為德、陰為刑。刑主殺而德主生。」

○度數

『太平經』庚部《七十二色死尸誠》第一百八十六「天有四維、地有四維、故有日月相推。星有度數、照察是非。人有貴賤、壽命有長短、各稟命六甲。」

○吉凶之期

『潛夫論』卜列「天地開闢有神民、民神異業精氣通。行有招召、命有遭隨。吉凶之期、天難謹斯。聖賢雖察不自專、故立卜筮以質神靈。」

○水旱

『太平經』丙部《天文記訣》第七十三「是故古者聖賢帝王、見微知著、因任行其事、順其氣、遂得天心意、故長吉也。逆之則水旱氣乖迕、流災積成、變怪不可止、名為災異。」

○人命長短、稟繫、星宿、厚薄

『太平經』庚部《有德人祿命訣》第一百八十一「篤達四方、意常通問、正其綱紀、星宿而置、列在四維。羅列各有文章、所行目有其常、繫命上下、各有短長。生命之日、司候在房、記著錄籍、不可有忘。命在子午、其命自長。丑未之年、不失土鄉。壽小薄、不宜有惡、使付土鄉。……」

『論衡』自紀「惟人性命、長短有期、人亦虫物、生死一時。年歷但記、孰使留之。」

○是爲順常

『太平經』庚部《寫書不用徒自苦誠》第一百八十七「慎無燒山破石、延及草木、折華傷枝、害於市里、金刃加之、莖根俱盡。其母則怒、上白於父、不惜人年。人亦須草自給、但取枯落不滋者、是爲順常。天地生長、如人欲活、何爲自恣、延及後生。」

○莫不被榮

『太平經』庚部《有過死謫作河梁誠》第一百八十八「春行生氣、夏成長、秋收、使民得以供祭。冬藏餘糧、復使相續、既無解時。神靈之施、莫不被榮、恩及蚊行、草木亦然。」

○巖牙

『太平經』戊部《五神所持訣》第一百一十一「願請問一大決、東方之神何故持矛乎。……物者各從其類。東方者物始牙出頭、尽生利、刺土而出、其精象矛、故爲矛。」

○垂枝布葉

『太平經』乙部《三急吉凶法》第四十五「萬物須雨而生、是其飲食也。須得昼夜、壹暴壹陰、昼則陽氣為暖、夜則陰氣為潤、迺得生長、居其處、是其合陰陽也。垂枝布葉、是其衣服也。」

『風俗通義』山澤・五岳「南方衡山、一名霍。霍者、萬物盛長、垂枝布葉、霍然而大。」
『道德真經指歸』「夫太山之木、本據於陰、末託於陽。雙枝布葉、華實青青。大而合抱、高連百尋者、生於无大、成於不爲。」

○覆華實令給人

『太平經』庚部《大壽誠》第二百「衆萬二千物、皆生中和地中、滋生長大、皆還自覆蓋、蔭其下本根。其花實以給身口、助其穀糧、使有酸鹹醋淡自在。」

○地之長名爲水母

『真誥』卷五「道有赤丹金精石景水母」

『無上秘要』卷三十「洞真金根經上、上清玉霞紫映內觀上法、一名金精石景水母王胞經、一名採服日根招霞之道、右出洞真金根經上。」

*『太平經』丙部《起土出書訣》第六十一「地者、陰之卑。水者、陰之劇者也。屬地、穿地皆下得水、水乃地之血脉也。……地者、萬物之母也。」

『老子』第八章「上善若水。水善利万物而不爭、處衆人之所惡。故幾於道。居善地、河上公注「水性善喜於地、草木之上、即流而下、有似於牝動而下人也。」心善淵、與

善仁、言善信、正善治、事善能、動善時。夫唯不爭、故無尤。」

○行恩布施

『太平經』庚部《善仁人自貴年在壽曹訣》第一百八十二「冀復小久、不敢施惡、更念當行恩德布施、蒙得其理。」

『漢書』董仲舒傳「天使陽出布施於上而主歲功、使陰入伏於下而時出佐陽。陽不得陰之助、亦不能獨成歲。終陽以成歲為名、此天意也。」

『後漢書』馮岑賈列傳「今更始諸將從橫暴虐、所至虜掠、百姓失望、無所依戴。今公專命方面、施行恩德。」

○反言自然

『老子』第十七章「功成事遂、百姓皆謂我自然。」河上公注「百姓不知君上之德淳厚、反以為己自当然也。」

○上知天意教民作法

『太平經』戊部《五神所持訣》第一百一十一「所以問者、天師幸哀後生為作法、不問則令後世不得知天道之意決。」

『太平經』己部《守一入室知神戒》第一百五十二「今天地神靈共疾惡之、故天乃親自謁、遣吾下為德君、更制作法也。」

○文理

『太平經』庚部《大功益年書出歲月戒》第一百七十九「大神言、上天地各有文理、知用前、不知自却、此自然耳。」

○天士

『太平經』丙部《九天消先王災法》第五十六「故當養置茅室中、使其齋戒、不睹邪惡、日練其形、毋奪其欲、能出無間去、上助仙真元氣天治也。是為神士、天之吏也。毋禁毋止、誠能就之、名為天士、簡閱善人、天大喜之、還為人利也。」

『史記』封禪書「是時上方憂河決而黃金不就、乃拜大為五利將軍。居月余、得四印、佩天士將軍、地士將軍、大通將軍印。」

○天上之事

『太平經』庚部《大聖上章訣》第一百八十一「天上之事、音声遙相聞、安得有隱也。」

○以時報

『太平經』庚部《天報信成神訣》第一百九十七「見天書戒、視其文辭、不戰自懾、何有負言。心常怖悸、何有安時。唯天大神、時哀省原、數見假貸、心知不以時報大恩。」